九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

英英辞典で遊ぶ：コロケーションを追いかけて

内田，諭
東京外国語大学特任講師

https://hdl.handle.net/2324/1932349

出版情報：英語教育. 62 (13), pp.34-35, 2014-02-14. 大修館書店
バージョン：
権利関係：

英英辞典で遊ぶ

内田　諭 Uchida Satoru

はじめに

英英辞典といえば、OED から OALD や LDOCE などのいわゆる英語学習辞典もが含まれるが、「連語辞典」をイメージする人は少ないだろう。実際、授業でアンケートを取っても「連語辞典を使ったことがない」という人が大半である。そもそも、自分が持っている電子辞書に入っていても、その存在さえ知らない人も少なくない。

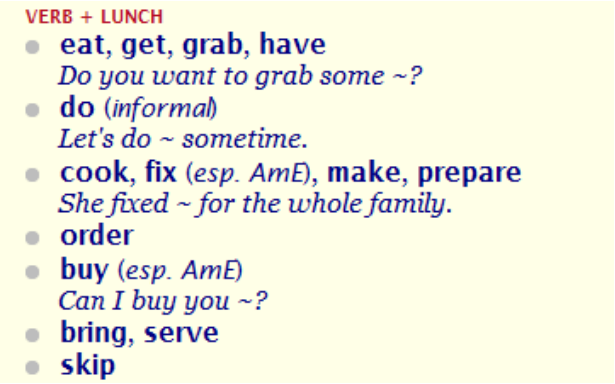
ここ数年、英英の「連語辞典」が相次いで販売されている。*Longman Collocations Dictionary and Thesaurus* (Pearson Longman, 2013), *Macmillan Collocations Dictionary* (Macmillan Education, 2010), *Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, 2nd edition (Oxford University Press, 2009)などがその例である。これらの連語辞典は、英語を学習する上で大きな助けとなる。本稿では、「連語」つまり「コロケーション」をキーワードに、連語辞典を使う意義と、学習者向け英英辞典の用例の「コロケーションをみる」という辞書の愉しみ方について述べたいと思う。

連語辞典の効用

知っている単語であっても「使える単語」であるとは限らない。例えば、「お昼ご飯」は lunch と言えるが、「お昼ご飯を抜く」（skip lunch）という表現は、上級の学習者であっても難しい。単語は実際には単独で使われることはほとんどなく、他の語（＝コロケーション）と連なって使われることが普通である。一般的によく用いられる組み合わせが言えないとすれば、自信を持ってその単語を「使える」とは言い難いだろう。

lunch を使える単語（＝発信語彙）にするには、連語辞典を使うことが効果的である。前述の *Longman Collocations Dictionary and Thesaurus* を引くと、go out for [to] lunch, make lunch, break for lunch などのコロケーションが見つかる。こうった表現をまとめて覚えることで、その単語を「使える単語」に変えることができる。その意味で連語辞典は「知っている単語」を「使える単語」に変える強力なパートナーであるといえる。

可能であれば、連語辞典をいくつか手元に置き、引き比べてみるとよい。それぞれの辞書には特徴があり、掲載されているコロケーションも異なる。「これは」と思うコロケーションがあれば、「発信語彙ノート」のようなものを作って書き留めておきたい。



Oxford Collocations Dictionary for Students of English, 2nd edition の CD-ROM 版の画面

知っている単語こそ連語辞典で引く

辞書を引くきっかけは、知らない単語との出会いあることが多いが、知っている単語こそ、連語辞典で調べる価値がある。先ほどの lunch の例も、この単語自体はほとんどの学習者は知っていると考えられるが、skip、go out for、break for などとの「組み合わせ」は、新情報である可能性が高い。連語辞典を普段から意識して使うことで、単語そのものだけではなく「単語の周り」にも意識が行くようになり、その語を中心としたネットワークを頭の中に構築することができるようになる。この作業は、既知語でこそ重要なものである。知っ

ている単語の数だけを増やしても英語の発信力は伸びないが、単語同士のネットワークの数を増やせば発信力は飛躍的に向上する。

コロケーションをみる際、名詞を中心にするとよい。そうすることで自然と概念ごとにまとまりができ、記憶にとどまりやすくなる。例えば、skip を中心に共起する名詞をみるよりも、lunch を中心として buy, grab, cook などの動詞をまとめたほうが、昼食に関する動作が体系化され覚えやすい。連語辞典でも、動詞と名詞の組み合わせは名詞のエントリーに記載され、動詞の項では副詞やフレーズ表現が中心になっている場合が多い。

英英辞典の用例でコロケーションをみる

OALD や LDOCE などの学習者向けの英英辞典の楽しみ方の 1 つに、用例のコロケーションを見比べるということがある。例えば、＜形容詞＋schedule＞というコロケーションを LDOCE で調べると、busy, tight などが出てくる。一方、*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (Merriam-Webster, 2008)ではこれらに加えて hectic, full, flexible, daily なども見つけることができる。後者の辞書は、「用例重視」の方針のもと、それぞれの見出し語に多くの例文を載せることを謳っているが、その結果、コロケーションのカバレッジが広くなっていることが伺える（一方、LDOCE では見出し語によってはコロケーションのコラムがあり（例：attempt）、手厚く扱っている）。また、英英辞典の用例を比較し、多くの辞書で使われているコロケーションがあれば、それはその語にとって非常に重要なものであることが読み取れる。実際に辞書を執筆する際も、用例に含めるコロケーションは慎重に選択される。用例のコロケーションを見れば、その辞書の（あるいは執筆者の）性格が読み取れるかもしれない。

コロケーションハンティング

英英辞典を用いたコロケーションの具体的な導入方法として、アクティビティを 1 つ紹介する。教室では連語辞典を持っていない生徒が多いと考えられるので、英英辞典（あるいは生徒のレベル次第では英和辞典でも可）を用いて活動を行う。

まず、ターゲットになる単語を決める（例えば schedule など）。生徒を 4,5 人のグループに分け、それぞれ辞書を持ち寄ってターゲットの単語のコロケーションを用例からピックアップさせる。この時、辞書にバリエーションがあると面白い。グループで重要だと思うコロケーションを、例えば 5 つ選んでもらい、それを全体で発表する。グループ間で重複があれば、それは重要なコロケーションであることがわかる。使用する辞書によっては意外なコロケーションが出てくる可能性もある。次に、コロケーションから日本語訳を考える。この時、日本語とのずれにも着目させたい（例：buy insurance→保険に入る）。中には busy schedule と hectic schedule のように訳し分けることが難しい場合もあるが、日本語でその差をどう出すか、あるいはそのニュアンスの違いをどう説明できるかを考えさせると面白いだろう。この次の授業では、日本語→英語（例：ぎっしり詰まったスケジュール→a tight schedule）で英作文ができるか、テストをすれば定着度が高くなるだろう。

限られたスペースで最大の効果を得るために作成された辞書の用例には執筆者の魂が込められている。華麗な定義や丁寧な注記だけではなく、用例のコロケーションにも深い味わいがある。「辞書を引く時にどこをみますか」と聞かれた時に「コロケーションです」と答えられたら、あなたはもう立派なコロケーションハンターである。

（東京外国語大学特任講師）